

## パートII. 旧約時代

### 11章 士師記の時代から王制へ

#### イントロダクション

1. 「神の国と悪魔の国の葛藤」というテーマに沿って聖書を読み解いている。

(1) この葛藤は、創世記3章以来続いているものである。

(2) この葛藤は、黙示録20～21章で終わる。

2. パートI. 葛藤の舞台設定 (1～3章)

(1) 神は、人類を臣民とする神の国を造ろうとされた。

(2) サタンは、悪魔の国を作り、自らが王になろうとした。

(3) 神は、創世記3章15節で対抗策を啓示された (原福音)。

3. パートII. 旧約時代 (4～17章)

4章 カインとアベル

5章 大洪水

6章 バベルの塔

7章 アブラハム契約

8章 出エジプト

9章 律法と幕屋

10章 カナン定住と士師記の時代

11章 士師記の時代から王制へ

(1) サタンはなぜ王制を好んだのか。

(2) 神はどのような対抗策を採られたのか。

4. アウトライン

(1) 民の霊的状态

(2) サムエルの登場

(3) 王を求める声

(4) サウルの登場

士師記の時代から王制への移行について学ぶ。

#### I. 民の霊的状态

1. 士師記の時代は、背教と混乱の時代であった。

(1) この状況に終止符を打つために、神はサムエルという器を用意された。

(2) 士師記の時代は、預言者の時代に向かう移行期であった。

- ①モーセ・ヨシュアの時代は終わった。
- ②まだ預言者の時代が到来していなかった。
- ③1サム3:1b

1Sa 3:1b そのころ、【主】のことばはまれにしかなく、幻も示されなかった。

## 2. イスラエルの民の信仰は、風前の灯のように消えかかっていた。

(1) 大祭司エリの目は、かすんできて、見えなくなっていた (1サム3:2b)。

- ①肉体の目とともに、霊的な目もかすんでいたことを表わしている。
- ②彼は、息子たちの暴走をくい止めることができなくなっていた。

(2) 指導者がいない民は、滅びるしかない。

- ①この状況の中に神が介入された。
- ②サムエルは、イスラエルに霊的覚醒をもたらす神の器である。

## II. サムエルの登場

### 1. サムエルは、祭司と預言者という二重の召命を受けた。

(1) 不妊の女であったハンナは、【主】に祈って息子を得た。

- ①彼女は、その息子をサムエルと名づけた (【主】は聞かれる)。
- ②彼女は、サムエルを【主】の働きのために献げた。

(2) 少年サムエルは、【主】からの語りかけを受けた (1サム3:1~14)。

- ①彼は、大祭司エリの子の没落をそのまま預言した。
- ②これが、サムエルの奉仕の始まりであった。
- ③預言者は、神のことばをそのまま民に伝える。

### 2. 大祭司エリが死に、サムエルが霊的指導者となった。

(1) ペリシテ人との戦いで、神の箱が奪われた。

- ①その知らせ受け、エリは首を折って死んだ (享年98歳)。
- ②神の箱が奪われたことで、イスラエルは国家存亡の危機に直面した。
- ③その後、契約の箱はペリシテの地からイスラエルの地に返還された。
- ④回り回って、キルヤテ・エアリムに20年間とどまることになる。

(2) 成人したサムエルは、ミツパの集会において、イスラエルをさばいた。

- ①イスラエルの全家に向かって、偶像礼拝を悔い改めるように激しく迫った。
- ②民は直ちに、バアルやアシュタロテを除き去った。

③その結果、建国以来最大のリバイバル（宗教改革運動）が起こった。

(3) このリバイバルは、イスラエルに4つの祝福をもたらした。

①40年にわたるペリシテ人の支配が終わった。

②失っていた領土を取り返した。エクロンからガテに至る地域。

③ペリシテ人との戦いが止んだ。再開されるのは、サウルの時代に入ってから。

④アモリ人の間に平和が訪れた（東の国境地帯も平和になった）。

3. サムエルは、生涯現役を貫いた。

(1) 1サム7:15

1Sa 7:15 サムエルは、一生の間、イスラエルをさばいた。

1Sa 7:16 彼は年ごとに、ベテル、ギルガル、ミツパを巡回し、これらすべての聖所でイスラエルをさばき、

1Sa 7:17 ラマに帰った。そこに自分の家があり、そこでイスラエルをさばいていたからである。彼はそこに【主】のために祭壇を築いた。

①ベテル、ギルガル、ミツパを巡回し士師としての務めを果たした。

②人々が難問題の解決を求めてやって来たとき、それに回答を与えた。

③これら3つの町に、「預言者のための学校（塾）」を設立した。

④巡回奉仕が終わると、ラマの家に帰り、そこでも士師としての任務を果たした。

(2) 70歳になった頃、2人の息子を士師に任命し、ベエル・シェバに派遣した。

①南部地方は息子たちに任せ、自分は北部地方だけをさばくことにした。

②しかし、それは失敗に終わった。

③息子たちは、父サムエルとは異なり、賄賂を取って裁きを曲げたのである。

④サムエルもまた大祭司エリと同じように、息子の養育に失敗した。

⑤ここに、サタンの妨害を見ることができる。

### III. 王を求める声

1. 12部族の長老たちが、王を与えて欲しいと要求した。

(1) 民のこの要求は、悪魔の誘いによるものである。

2. 悪魔は、それまでの経験を通して教訓を学んだ。

(1) 士師たちの時代が続く限り、背教は地域的なものにとどまる。

①このままでは、全イスラエルを墮落させるのは不可能である。

(2) 王政に移行すれば、王の墮落が全イスラエルの墮落につながる。

- ①当時、イスラエルの政治形態は神政政治であった。
- ②神が王で、神は預言者や士師を通して民に語りかけていた。
- ③しかし民は、それよりも人間の王に信頼を置く政治形態を求めた。

3. サムエルは、神の御心を求めた。

- (1) サムエルは、不愉快になったが、【主】に祈ると、次のような答えがあった。
  - ①民の言う通りにせよ。
  - ②彼らは、サムエルを退けたというよりは、神ご自身を退けたのである。
  - ③これは新しいことではなく、民の歴史上いつも起こってきたことである。
  - ④民を治める王の権利を民に知らせよ。

4. サムエルは、王政には犠牲が伴うことを民に説明した。

- (1) サムエルの警告
  - ①王は、息子たちを徴兵し、戦士として使役するようになる。
  - ②王は、娘たちを取り、王宮で仕えさせるようになる。
  - ③王は、新たに税を徴収し、民は重税で苦しむようになる。
  - ④王は、奴隷や家畜の中から最上のものを取り、仕事をさせるようになる。
  - ⑤それまで民が持っていた自由は、かなりの程度制限されるようになる。
- (2) 民は、その警告に耳を傾けず、他国民のようになりたいと王を求めた。
  - ①ここでの民の罪とは、神を退け、人間の王に頼ろうとしたことにある。
  - ②もう一つの罪は、神の時を無視して王を求めたことである。

IV. サウルの登場

1. 神は、イスラエルに王が必要なることを予知し、人材を用意しておられた。

- (1) それがダビデである。
  - ①ダビデは若過ぎたので、サウルが王に選ばれることになった。
  - ②神の時を待てない者は、必ず墓穴を掘るようになる。

2. イスラエルは、サウルを王とする王政（統一政府体制）に移行した。

- (1) 悪魔にとっては、一挙に契約の民を墮落させる好機が到来したことになる。
  - ①これ以降悪魔は、サウルを標的として激しく攻めた。

3. 即位して2年後、サウルは【主】に背き、誤った判断を下した。

- (1) 祭司にしか許されていないいけにえを、自らの手で献げた。
  - ①サムエルからその罪を糾弾されると、自分を正当化する理屈を並べ立てた。

②神は、聖霊をサウルから取り去り、ダビデにお与えになった。

(2) それ以降サウルは、より激しい悪魔の攻撃にさらされることになる。

①1サム 16:14

1Sa 16:14 さて、【主】の霊はサウルを離れ去り、【主】からの、わざわいの霊が彼をおびえさせた。

(3) サウルの性格は、異常なものに変質していった。

①常軌を逸した自己愛

②異常なほどの嫉妬心

③全的墮落

#### 4. 神は、ペリシテ人との戦いを用いて、この状況に介入された。

(1) サウルは、ギルボア山でのペリシテ人との戦いで戦死した。

①3人の息子（ヨナタン、アビナダブ、マルキ・シュア）も戦死した。

②ペリシテ人たちは、特にサウルとその息子たちを狙い撃ちにした。

(2) サウルが戦死したのを見て、イスラエル人たちは、町々を捨てて逃走した。

①その後にペリシテ人がやって来て、そこに住むようになった。

②イスラエルの人々が築いてきた町々が、敵の手に渡ったのである。

(3) まとめ

①王としてのサウルは、最初は素晴らしいスタートを切った。

②小さな不従順の積み重ねにより、【主】に反抗することが習慣になった。

③その背後にサタンの策略があった。

④神は、サウルと息子たちを戦死させることで、悪魔の策略を阻止された。

⑤次に神が立てる器は、ダビデである。